

社会技術研究開発事業
令和5年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」
「 サービス・モビリティと多形態コミュニティの繋がり
による社会的孤立・孤独予防モデル 」

米澤 拓郎
名古屋大学 大学院工学研究科 准教授

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2-1. 研究開発目標	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン	2
2-3. ロジックモデル	3
2-4. 実施内容・結果	4
2-5. 会議等の活動	10
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	11
4. 研究開発実施体制	12
5. 研究開発実施者	14
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	15
6-1. シンポジウム等	15
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	15
6-3. 論文発表	15
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	15
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等	16
6-6. 知財出願	16

1. 研究開発プロジェクト名

サービス・モビリティと多形態コミュニティの繋がりによる社会的孤立・孤独予防モデル

2. 研究開発実施の具体的内容

2-1. 研究開発目標

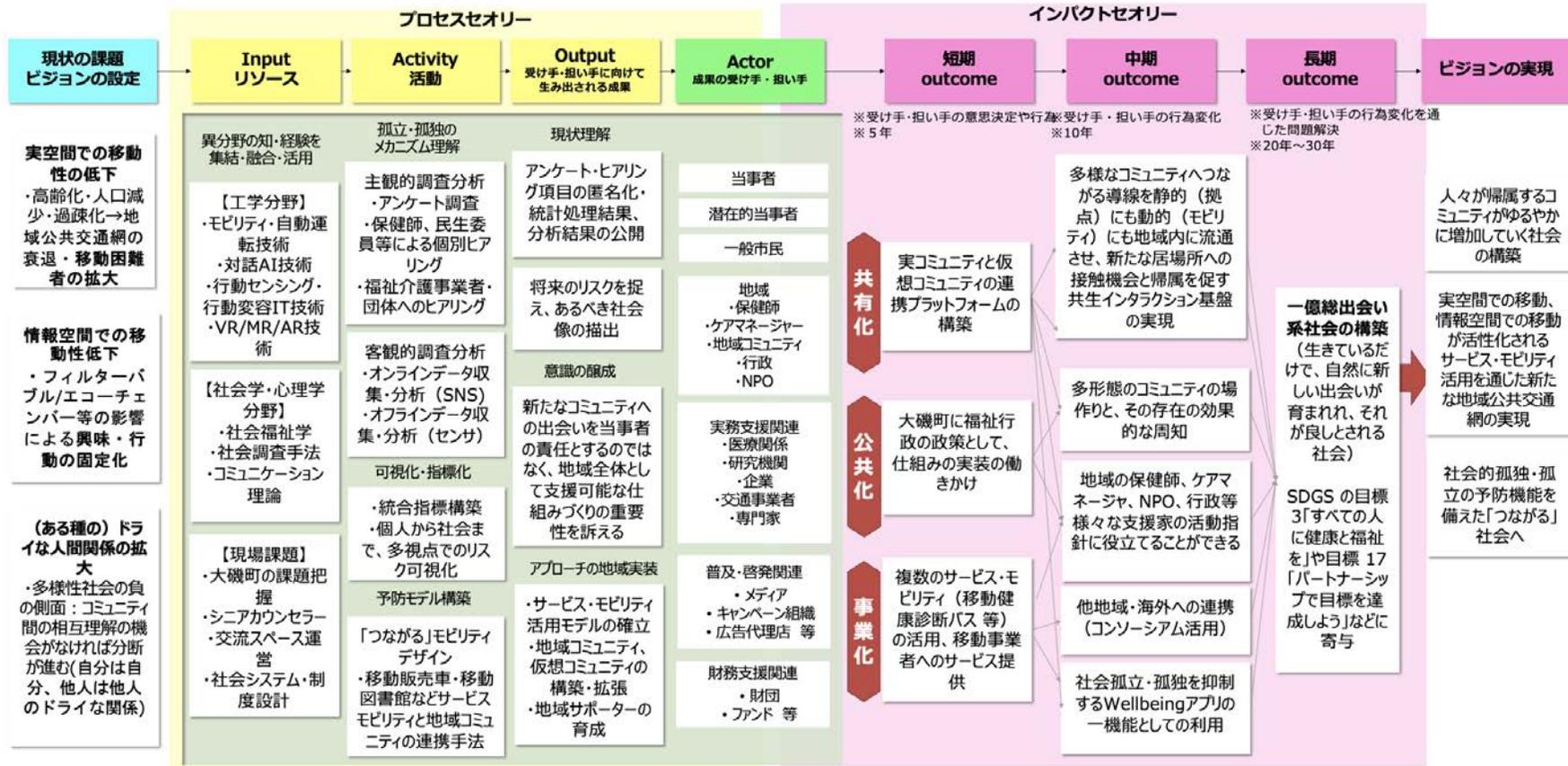
本研究開発プロジェクトでは、研究者と当事者が共に研究チームのメンバーとなり、興味・思考・行動と孤立・孤独のメカニズム（指標づくりを含む）を定量的手法を駆使しながら共に行う。指標は、医療職、福祉職、行政専門職など誰が見ても納得できるものであることが目指され、会った人の数、外出時間・回数、数や時間といった一律の標準的指標だけでは測れない、内的な孤独の自覚を表現できるようなものとなることを目標とする。さらに、地域内で自然に他のコミュニティへの接触が増える仕掛けとして、つながりを育むオンライン・オフラインコミュニティの接続技術、およびサービス・モビリティを活用した「近づいてくる」コミュニティへの導線づくりからなる孤独・孤立予防モデルを実現する。具体的な目標として、2つ以上のメタバース空間をオンラインコミュニティとして、1つ以上のオフラインコミュニティを運用するとともに、2つ以上のサービス・モビリティを通じた地域内のコミュニティ導線を実現する。実験参加者のうち、計50人以上へのアンケート調査を行い、提案基盤が孤独・孤立予防に役立つかどうかの評価を行い、その有用性を示すことを目的とする。また、各コミュニティにおける滞在回数、滞在時間などの定量的なデータも含め、学術的な評価手法に基づきその評価を行う。

2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

Q1.興味・行動の幅と社会的孤独・孤立の尺度との関係性

Q2.サービス・モビリティが人々をゆるやかに繋がるメディアとなりえるか

2-3. ロジックモデル



実施項目①-1：メカニズム理解

実施内容：大磯町に関する行政の既存資料（「大磯町第5次総合計画基本構想・前期基本計画 わたしたちが創るまち大磯」（令和3年3月）や「地域福祉に関するアンケート調査 調査結果報告書」（令和3年4月）など）を読み込み、大磯町の特性を把握する。また、行政の行ってきた「地域のつながり事業」に関わってきた方々、町内の区長会やNPOなどの市民活動に取り組んでこられた方々、東光院関係者の方々などからも話を聴く。このようにして得られた知見について、研究班全体で話し合い、大磯町民の興味や嗜好の幅・変化について、地域内の人やサービスの移動性と孤独・孤立の関係性について実態に迫ってゆき、課題を抽出してゆく。

期間：令和5年10月～令和6年3月31日

実施者：細田 満和子（東京大学・特任研究員 / 星槎大学・教授）

対象：文献調査、行政資料、聴き取りは行政、市民活動実施者、東光院関係者など

実施項目①-2：社会像の描出

実施内容

実施項目①-1のメカニズム理解に基づき、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出を行う。大磯町におけるあるべき社会像を出発点としつつも、日本全体における社会背景と将来予測、情報とモビリティの技術背景と将来予測を整理し、孤立・孤独の予防機能を内在する社会像を明確化する。そのため、社会背景、技術背景と今後の見通しに関する文献調査をまず実施し、その整理を行う。また、孤立・孤独予防等に取り組む専門家にヒアリングを実施する。さらに、大磯町の行政・住民が参加するワークショップを主催し、これらの調査・議論結果を伝えるとともに、町民とともにあるべき大磯町の社会像の議論を行う。

期間：令和5年10月～令和6年3月31日

実施者：米澤 拓郎（名古屋大学・准教授）

対象：文献調査、専門家、大磯町

当該年度の到達点②

大磯町における社会的孤独・孤立に陥るリスクを理解するための準備段階として、主観的データおよび客観的データの収集方法を詳細化し、実施体制を整えるとともに、段階的な実施の開始を行う。準備段階においては、本研究が仮説としておく興味・嗜好の幅と変化、地域内の人やサービスの移動性を主観的・客観的に定量化可能な手法を立案する。また、主観的・客観的に得られたデータの統合分析手法および指標化の手法を立案する。

実施項目②-1：主観的データの収集準備・段階的实施

実施内容：住民アンケートおよびインターネット調査を通じた全戸調査で、主観的なデータをもとにした分析を行う。その際、回収率を上げる工夫として、大磯町のサイトにアンケート協力のバナー掲載を依頼、区長連絡会（毎月1回開催：大磯町からの全24区の区長への情報連絡会）の場で趣旨等説明して協力依頼、大磯コンソの会員からの「お知らせ」配信希望者に協力依頼（口コミを含めて）等を行う。また、アンケート等ではとらえきれない住民の声をつかみ取るために、保健師や医師や福祉関係専門職などの協力を適宜仰ぎながら、聴き取り（ヒアリングやインタビュー）を実施する。このような実態調査を踏まえて、孤立・孤独を予防する仕組みとして大磯町と連携した実証実験の取り組みの構築を行う。

期間：令和6年1月～令和6年10月30日

実施者：細田 満和子（東京大学・特任研究員 / 星槎大学・教授）

対象：アンケートは全大磯町民、聴き取りは保健師や医師や福祉関係専門職や行政職員等

実施項目②-2：客観的データの収集準備・段階的实施

実施内容：大磯町が保有している町民の特性（地域ごとの平均年齢や性別割合、また独居老人の人数）や移動性に関わる情報（信号の位置、バス停の情報や人がよく集まる場所・時間の情報）などの知見の共有を目的とした、大磯町行政とのミーティングを実施する。また、さらに粒度の細かい町民の興味や移動性を理解するために、町民のスマートフォンから得られるデータを取得する実証実験の実施を検討する。具体的には、町民のプライバシーを考慮した、興味や移動性を捉えうる取得データ種別の選定や取得頻度の検討。また、多様な町民（年齢、性別や職業など）からのデータが求められるため大磯町から共有された知見を参考に参加募集方法についても検討する。このような検討を重ね、アプリケーションの設計・開発やデータ管理環境の整備を行う。

期間：令和6年1月～令和6年3月31日

実施者：中澤 仁（慶應義塾大学・教授）

対象：大磯町保有行政データ、大磯町町民、空間統計等データ（オープンデータなど）

実施項目②-3：統合指標化手法の検討

実施内容：実施項目②-1、②-2の検討とともに、そこで得られる可能性のある結果をどう統合し、社会的孤立・孤独のリスク指標として定量化するか、の検討を行う。本年度はまず文献調査を行い、これまで学術的に導出されてきた関連する指標の整理を行い、本研究プロジェクトへの適用可能性、拡張の可能性を検討する。その上で、実施項目②-1、②-2で得られる独自の調査結果を想定し、統合指標化手法の構築を検討し、シミュレーションデータなども対象とした上で、検証を進める。

期間：令和6年1月～令和6年3月31日

実施者：米澤 拓郎（名古屋大学・准教授）

対象：文献調査、実施項目②-1、②-2で得られるデータ

(3) 成果

実施項目①-1：メカニズム理解

本実施項目では大磯町における行政資料を調査し、また社会的孤立・孤独予防のための関係者にヒアリング調査を実施した。大磯町の特徴は、①面積的に東西8Km、南北4Kmのコンパクトな土地空間の中に、山場-農場-まち場-海場という日本の国土・地域構造及びこの地域特性を反映した生活様式・価値観が凝縮された形で存在するということ、②大磯町（現在人口3.1万人、高齢化率34.5%）も日本全国の動向と同様に総人口減少・高齢化の流れにある一方で、都心への通勤可能な東京圏外縁部の豊かな自然や歴史・文化に恵まれた地域と云うこともあり、最近では子育て世代（30～40歳代）を中心に社会人口増ともなっている。大磯町関係者にヒアリング調査をしていると、多くの方が大磯町に愛着を感じており、歴史があり文化の香り高い町の住民であることに誇りを持っているという印象を受ける。これは地域の集団的凝集性を高めることに寄与する一方で、新規住民や「大磯らしくない住民」に対する排除を生む可能性がある。このような課題がある中で、大磯町ではコミュニティの活性化ということで、地域住民の交流を促進するために、共通の活動やイベントが定期的に開催されている（東光院のフリースペースや多世代食堂、暮らしの保健室、大磯市など）。これらは、様々な世代や興味を持つ人々が交流できる場を提供していると考えられるが、実証的に検証することが必要であり、本プロジェクトでも大磯町で開催されるイベントへブースを出展し住民と直接コミュニケーションを行うとともに、関係者と引き続き議論を行う予定である。

実施項目①-2：社会像の描出

本年度はプロジェクト初年度であるため、社会的孤立・孤独の予防機能を内包する社会像はどうあるべきかの理解を深める為に、文献調査（書籍および論文）、講演会参加（5件）や専門家へのヒアリング（2件）を進めた。調査と平行し、ゆるやかにつながるきっかけを構築するための手法を関係者会議や専門家とともに議論した。調査や議論の結果、現代におけるモビリティの概念の変容（ジョンアーリ「モビリティーズ」等の文献調査）と物理空間の移動性の低下や情報空間における興味の固定化や偏在化の問題が浮き彫りとなるとともに、それらが社会的孤立・孤独を誘因しうる問題点が明らかになった。特に、人々のコミュニケーションおよび相互理解に必要なところの内的状態が呼応する共有リアリティの構築の重要性に着目し、それを高めるための社会像のあり方、技術や倫理の課題等の検討を進めた。一方で、当初本年度中の開催を予定していた大磯町の行政関係者、住民が参加するワークショップは、会場手配の都合上、2024年6月に開催することとなった。それに先だってサービス・モビリティを活用し、生活のあらゆる場面で人々がゆるやかにつながる社会像の仮説シナリオ構築を行った。

実施項目②-1：主観的データの収集準備・段階的实施

孤立・孤独に関する主観的データの収集準備を目的として、本年度は大磯町で孤立や孤独の問題に取り組んでいる地域の諸団体や行政へのヒアリングを行った。対象団体は、大磯

町西部地域包括支援センター、暮らしの保健室、大磯町民生委員・児童委員、東光院、大磯町町民福祉課、徳洲会湘南大磯病院、かたつむりの家、地域支援センターそしん、湘南あゆみの会、大磯住民の方、社会福祉協議会等である。

諸団体を訪問し、施設長並びに職員・担当者の方々にヒアリングを行った結果、ほとんどのインフォーマントの方が、地域で孤立・孤独の問題があることを認識していた。そして本人の訴えがなく、一見孤立・孤独の問題がないかのような人であっても、周囲が気付いて相談や支援につなげることの重要性について言及していた。「顕在化した孤立・孤独」と「潜在的な孤立・孤独」とに分けて実態を把握していくことが必要であろう。

また、交通に関しては、大磯町は丘陵地域があり、古くからの住宅地域もあるので、坂が多く道が細い場所も多くあるので課題も多い。例えば、高齢者や障がいのある方などの外出の機会が制限される、一般車や福祉車両が自宅まで入れないといったことである。

このような状況に対して、町では補助路線バスやオンデマンド交通（タクシー）の制度を導入している。補助路線バスは、神奈川中央交通で廃止する予定だった山地域（市街化調整、区域）に、ミニバスを走らせ、赤字分を町が補助しているというものである。神奈川中央交通はコロナ下で赤字路線を廃止したいという意向だったが、行政が関わって代替案を出した。またオンデマンド交通（タクシー）は、一定地域（西小磯）に30か所、街中に6か所ある所に行けるようになっている。伊豆箱根交通が運営しており、単価は500円で、差額を町が補助する仕組みになっている。この制度が発足した背景として、地域住民が2年間で20回以上の協議会を行って、自分たちで話し合い、自分たちで希望を計画した。恩田万戸タクシーが立ち寄る場所は、町と協議しながら決めた。他の地域の方が、利用率は高く、他地域からも自分たちの地域に広げてほしいという希望がある。ただし他の地域は一般の交通が普及しているの、それを使ってほしいと町は考えている。

このように、大磯町において孤立・孤独が問題であるという認識は関連団体や行政は持っており、「顕在化した孤立・孤独」に関しての対応はできる範囲で行っている様子が見られる。しかし「潜在的な孤立・孤独」に関しては、存在するという認識はあるものの、いかに把握するのかという点に関しては今後の課題となっていると判断される。

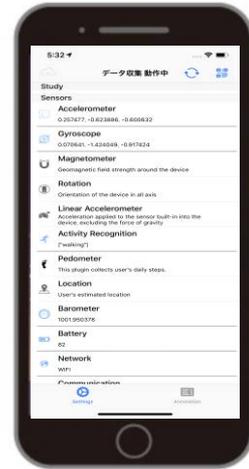
実施項目②-2：客観的データの収集準備・段階的实施

孤立・孤独を定量的に評価可能とするデータ収集を目的として、本年度は孤立・孤独を増加させた社会的背景の調査、収集データの検討、収集データから孤立・孤独を推定する客観データを計算する方針の検討、およびデータ収集技術の構築を実施した。

社会的背景調査に関して、主に昭和の社会に関する文献を用いて、労働人口の地理的分布の変遷、家族構成の変遷、コミュニティの消失、および孤独感の関連要因を調査した。第二次大戦後に集団就職により農村部から都市部へ大規模な人口流入が生じた結果、それまで一般的であった経営組織としての家から、親子2代の家に変遷したいわゆる核家族化がまずみられる。さらに、家屋の構造が、複数の和室が襖で緩やかに区切られた日本家屋から、複数の洋室が壁とドアで明確に区切られた現代家屋に変遷したことで、家屋内でも人と人の分離が進んだことが確認できた。また文献[1]では、日本人男性では平日により多くの人と接するほど孤独感が弱く、日本人女性では家族や友人と連絡する頻度が高いほど孤独感が弱い傾向が示されている。これらから、家屋外での他者との結びつきが孤立・孤独に大きな影響を与えることとなったと考えられる。以上から、より多くのコミュニティに属する人は孤立感・孤独感が低いと示唆される。収集データと客観データ計算方針の検討に関して、上記の結果より、他者との結びつきを示しうる値

をスマートフォンを用いて収集することを前提とし、以下の値を収集することとした。まず、人（個人）の空間的分布とパターンを客観データとして計算する。空間的分布は、ある個人が訪れる場所を意味し、それが多様であるほどその個人の属するコミュニティも多様であると推定する。またパターンは、ある個人が同一の空間移動を繰り返している様子を意味し、そうした繰り返しはその個人が属する一つのコミュニティによって生じると推定する。例えば毎平日の同時刻に勤務地と自宅とを行き来する行動は、勤務先コミュニティへの帰属だけを意味する。したがって、多様なパターンを有する個人は、多様なコミュニティに属していると考えられる。以上の計算を可能とするために、調査対象者の移動距離、歩数、時刻を主に収集することとした。調査対象者のプライバシーを保護するため、位置情報は収集しない。パターンは歩数と時刻から推定し、空間移動の範囲を移動距離から推定する。

データ収集技術の構築に関して、AWARE フレームワークを用いたスマートフォンアプリケーションの構築に着手した。同アプリケーションはスマートフォンでバックグラウンド動作し、スマートフォンに搭載されたセンサを用いて、上述した値を常時計測し、サーバに保存する。上図に同アプリケーションのスクリーンショットを示す。



[1] 林萍萍. (2023). 孤独感の関連要因に関する日中比較: ISSP2017 を用いた分析. 国際文化学, 36, 93-115.

実施項目②-3：統合指標化手法の検討

文献調査とこれまで学術的に導出されてきた関連する指標の整理から、本研究プロジェクトへの適用可能性、拡張の可能性の検討実施を行ってきた。本研究における仮説、社会的孤立・孤独と興味・行動の幅との関係性を主観・客観性をもって統合的に指標化するため、実施項目②-1、②-2 で得られる調査結果の想定を進めた。社会的孤立・孤独を測る指標に関しては他採択プロジェクトにおける調査手法も参考とした選定を進めるとともに、主観的アンケート実施内容（属性情報や日々の移動情報、知的好奇心尺度等）と客観的データ分析実施内容（移動パターン分析や活動量計測）の実施計画を進めるとともに、それを大磯町の行政区分15地域で紐付けて分析を進める手法の検討を行った。

（4）プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

Q1.興味・行動の幅と社会的孤独・孤立の尺度との関係性

様々な文献調査やヒアリング調査などから、地方公共交通の衰退や、エコチェンバーやフィルターバブルなどの影響により、物理空間と情報空間の両空間において興味や行動の幅が制約されようとしている社会的な流れが明らかとなり、それが直接および間接的に社会的孤独・孤立へ影響を与えているという仮説が論理的帰結として明らかになってきたと考えている。今後、仮説に基づいて主観的アンケート調査と客観的調査の実施を行い、統合的にその関係性を評価していく計画である。

Q2.サービス・モビリティが人々をゆるやかにつなげるメディアとなりえるか

ジョン・アーリ「モビリティーズ」などの文献調査を進めるとともに、技術トレンドや社会構造の変化に関する調査、議論を行った。モビリティのパラダイムが自動運転技術によって大きく変容しようとしている中で、社会的孤立・孤独を予防するためにサービス・モ

ビリティの果たす役割は重要となってくると確信を深めている。人々をゆるやかにつながるメディアとしてサービス・モビリティを利用するために、いくつかのシナリオ（移動保険室、移動キッチンなどの活用）を関連事業者とともに検討しており、2024年6月に開催を予定するシンポジウムにおいて行政や地域コミュニティの方々とより深い議論を行いたいと考えている。

(5) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

- ・プロジェクトは概ね順調に進行中。地域関係者と継続した議論も行えている。
- ・懸案であったサービス・モビリティ事業者との連携も、プロジェクト内でのサービス運営の可能性や、移動販売事業者との連携可能性を高めることができおり、当初の計画以上の進展があった。
- ・一方当初本年度予定であったワークショップ/シンポジウムは会場手配の関係から遅延し、2024年6月に実施することとなった。

2-5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2023年 10月 11日	プロジェクト打ち合わせ(研究課題1)	Zoom	メカニズム理解および社会像の描出に関する調査共有・議論
2023年 10月 27日	RISTEXキックオフミーティング	大磯町役場・東光院	プロジェクト全体のキックオフミーティング
2023年11月 20日	大磯町関係者打ち合わせ	大磯町役場、東光院	名古屋大学、東京大学、星槎大学、大磯コンソ、大磯町職員、東光院関係者の打ち合わせ
2023年11月 24日	研究課題1打ち合わせ等	大磯町西部地域包括センター、東光院	東京大学、星槎大学、社会福祉士、介護専門員との打ち合わせ
2023年 11月 28、29日	RISTEX領域会議	AP市ヶ谷 8F Aルーム	領域会議への参加・発表
2023年12月 1日	研究課題1打ち合わせ	Zoom	東京大学・星槎大学の打ち合わせ
2023年 12月 7日	RISTEX全体ミーティング	Zoom	プロジェクト全体の進捗状況共有、今後の計画の議論
2023年 12月 8日	プロジェクト打ち合わせ(研究課題1)	名古屋大学	メカニズム理解および社会像の描出に関する調査共有・議論
2023年 12月 13日	プロジェクト打ち合わせ(研究課題1)	名古屋大学	メカニズム理解および社会像の描出に関する調査共有・議論

2023年 12月 15日	モビリティおよび社会的孤立・孤独に関する合同勉強会	慶應義塾大学 SFC および Zoom	プロジェクトに関する最新の研究状況に関する勉強会兼今後の研究計画の打ち合わせ。
2024年 1月 16日	Leaders ミーティング	Zoom	各研究組織の代表者による研究進捗状況共有および今後の研究課題の打ち合わせ
2024年 1月 24日	研究課題1打ち合わせ	Zoom	東京大学・星槎大学の打ち合わせ
2024年 1月 31日	RISTEX全体ミーティング	Zoom	プロジェクト全体の進捗状況共有、今後の計画の議論
2024年 2月 5日	【孤立】R3/R5採択PJ戦略会議@オンライン	Zoom	戦略会議での発表・参加
2024年 2月 8日	Leaders ミーティング	Zoom	各研究組織の代表者による研究進捗状況共有および今後の研究課題の打ち合わせ
2024年 2月 22日	研究課題3に関する打ち合わせ	タニタヘルスリンク本社	研究課題3に関して、名古屋大学チームおよび慶應義塾大学とタニタヘルスリンク社によるモビリティ×健康情報機器の利活用に関する打ち合わせ
2024年 3月 24日	孤立・孤独予防に関する調査・勉強会	群馬県 たむらたけしこころの診療所	名古屋大学チーム、慶應義塾大学チーム、および協力組織 (IIC) による孤立・孤独・ひきこもりの専門家 (田村先生) へのヒアリング調査および研究打ち合わせ

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

プロジェクトのトピックに関する各コンソーシアムと連携を進めており、研究成果の活用・展開可能性の検討が進んでいる。具体的には、慶應義塾大学地域IoTと情報力研究コンソーシアム、健康情報コンソーシアム、名古屋大学卓越大学院TMIプログラム、名古屋大学大学院医学系研究科、トヨタテクニカルディベロップメント、NPO地域魅力などと連携を開始した。

4. 研究開発実施体制

1) 名古屋大学グループ (米澤拓郎)

名古屋大学大学院工学研究科

- 実施項目：

研究開発要素 1

「社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出」

1-2 社会像描出

研究開発要素 2

「人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手法(指標等)の開発」

2-2 統合指標化

研究開発要素 3 「社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み」

3-1 オンラインコミュニティ構築

3-3 サービス・モビリティ構築

3-4 実証実験

グループの役割の説明： 本グループにおいては、本プロジェクトにおける社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出をそれに陥るリスクの指標化とともに、研究代表グループとして実施する。特に、物理空間および仮想空間における移動性の低下による社会的孤立・孤独拡大の懸念を解決するための、サービスモビリティと多形態のコミュニティを接続した孤立・孤独予防モデルを構築し、実証実験を通じその効果を明らかにする。効果検証の方法に関しては、実験参加者に対する事前・事後のアンケートとして孤立・孤独感の尺度の変化に加え、コミュニティに関する尺度（例：地域社会に対する態度尺度、コミュニティ感覚尺度など）を利用した検証、直接インタビューによる効果検証を検討する。また、実験に関わる行政職員や、サービス・モビリティ提供事業者にとっても、本研究プロジェクトの取り組みが提供者自身の取り組み・ビジネスにとって有益か、また持続可能な取り組みとなりうるか等、聞き取り調査を行う。

2) 東京大学グループ (細田満和子)

東京大学 医科学研究所

- 実施項目：

研究開発要素 1

「社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像

の描出」

1-1 メカニズム理解

研究開発要素2

「人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手法(指標等)の開発」

2-1 アンケート調査・分析

グループの役割の説明：本グループにおいては、物理空間および仮想空間における移動性の低下による社会的孤立・孤独拡大の懸念を解決するため、孤立・孤独感と主観的に測定可能な興味・行動の枠との関係性に基づいたメカニズム理解を目指す。住民アンケートおよびインターネット調査を通じた全戸調査で、主観的なデータをもとにした分析を行う。その際、回収率を上げる工夫として、大磯町のサイトにアンケート協力のバナー掲載を依頼、区長連絡会（毎月1回開催：大磯町からの全24区の区長への情報連絡会）の場で趣旨等説明して協力依頼、大磯コンソの会員からの「お知らせ」配信希望者に協力依頼（口コミを含めて）等を行う。また、アンケート等ではとらえきれない住民の声をつかみ取るために、保健師や医師や福祉関係専門職などの協力を適宜仰ぎながら、聴き取り（ヒアリングやインタビュー）を実施する。このような実態調査を踏まえて、孤立・孤独を予防する仕組みとして大磯町と連携した実証実験の取り組みの構築を行う。

3) 慶應義塾大学グループ (中澤 仁)

慶應義塾大学 環境情報学部

- ・ 実施項目：

研究開発要素 2

「人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手法(指標等)の開発」

2-2 行動データ収集・分析

研究開発要素 3 「社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み」

3-2 オフラインコミュニティ構築

グループの役割の説明：本グループにおいては、物理空間および仮想空間における移動性の低下による社会的孤立・孤独拡大の懸念を解決するため、孤立・孤独感と客観的に測定可能な興味・行動の枠との関係性に基づいたメカニズム理解を目指す。特にスマート端末等を通じて得られた活動量などの客観的なデータをもとにした分析を行う。また孤立・孤独を予防する仕組みとして、つながりを生むオフラインコミュニティの構築を設計する。

5. 研究開発実施者

名古屋大学グループ (リーダー氏名：米澤 拓郎)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
米澤拓郎	ヨネザワタク ロウ	名古屋大学	大学院工学研 究科	准教授
浦野健太	ウラノケンタ	名古屋大学	大学院工学研 究科	助教
片山晋	カタヤマシン	名古屋大学	大学院工学研 究科	特任助教
石崎 冴香	イシザキサヤ カ	名古屋大学	大学院工学研 究科	技術補佐員
早川 京花	ハヤカワキョ ウカ	名古屋大学	未来社会創造 機構	技術補佐員
林田 望海	ハヤシダノゾ ミ	名古屋大学	大学院工学研 究科	大学院生
志村 魁哉	シムラカイヤ	名古屋大学	大学院工学研 究科	大学院生
渡辺 圭貴	ワタナベヨシ キ	名古屋大学	大学院工学研 究科	大学院生

東京大学グループ (リーダー氏名：細田 美和子)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
細田 満和子	ホンダ ミワ コ	東京大学 星槎大学	医科学研究所 教育学研究科	特任研究員 教授
堀越 由起子	ホリコシ ユ キコ	星槎大学	共生科学部	教授

慶應義塾大学グループ (リーダー氏名：中澤 仁)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
中澤 仁	ナカザワ ジン	慶應義塾大学	環境情報学部	教授
大越 匡	オオコシ タダシ	慶應義塾大学	環境情報学部	准教授

佐々木航	ササキ ワタル	慶應義塾大学	政策・メディア ア研究科	特別研究員
杉本なおみ	スギモト ナオミ	慶應義塾大学	看護医療学部	教授
本田由佳	ホンダ ユカ	慶應義塾大学	政策・メディア ア研究科	研究補助員

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

なし

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

(2) ウェブメディアの開設・運営

- ・JST RISTEX AmPlateaプロジェクト <https://internet-of-realities.org/amplatea/>
2024年3月1日

(3) 学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・ポスター発表、佐々木航（慶應義塾大学）、「JST RISTEX AmPlatea Project: 社会的孤独・孤立予防に向けて」、第1回Internet of Realitiesシンポジウム、2023年12月5日 <http://internet-of-realities.org/symposium2023.html>
- ・ポスター発表、米澤拓郎（名古屋大学）、「JST RISTEX AmPlateaプロジェクト」、「スマートシティと生成・AI」シンポジウム、2024年2月26日

6-3. 論文発表

(1) 査読付き（ 0 件）

(2) 査読なし（ 0 件）

6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

(1) 招待講演（国内会議 2 件、国際会議 0 件）

- ・基調講演、米澤拓郎（名古屋大学）、「Internet of Realitiesに向けて」、WIDE合宿、2024年3月5日

(2) 口頭発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

(3) ポスター発表 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

6-5. 新聞/TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (1 件)

- ・細田満和子、孤立・孤独を生まない地域づくり—神奈川県大磯町のお寺の取り組み、m3 医療維新、2024年2月4日 (日)配信、
<https://www.m3.com/news/iryoishin/1189582>

(2) 受賞 (0 件)

(3) その他 (0 件)

6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (0 件)

(2) 海外出願 (0 件)